

看護学生の被暴力体験の実態 ～認知症高齢者からの暴言・暴力への 対応の一考察～

五十嵐正己、高橋智美、大屋愛里
新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】高齢者虐待の危険因子には、認知症高齢者の日常生活動作能力の低さ、認知症症状の興奮や攻撃性が挙げられており、認知症と虐待は密接な関係にある。つまり認知症症状である暴力を受けた際の心理的ダメージは虐待につながりやすい。介護施設の職員は認知症に配慮したケアに取り組みながらも、暴力や徘徊といった認知症特有の症状に対応しきれず心身の負担から職場を去る人もいる。また、新入職看護師の暴力への介入スキルの脆弱さも明らかになっている。つまり、認知症症状を理解して臨床で働いている看護師、介護士であっても暴力についての対応は困難であるといえる。そのため臨床経験の少ない看護学生はより暴力への対応に困難を極めると考えられる。そこで臨床経験の少ない看護学生が、認知症高齢者から暴言・暴力を受けた時どのように受け止め、その時実際にどのような対応をしたのかを明らかにする。その結果、認知症高齢者から看護学生が受ける暴力の実態が明らかになり、学生だけでなく未熟な新入職看護師にとっての効果的な暴言・暴力への対応の仕方が見えてくるのではないかと考えた。

【方法】1. 研究デザイン

記述的研究デザイン 調査研究

- 1)調査方法 自記式質問紙を用いたアンケート調査
- 2)分析方法 記述統計、記述内容の類型化
- 3)調査期間 2017年8月

2. 研究対象

A 大学看護学科において、領域別看護学実習を履修した4年生90名

3. 倫理的配慮

調査は、倫理審査委員会の承認（17882-170816）を受け実施した。アンケート調査は自由意志で参加できることを説明するとともに、個人を特定できないように配慮した。

【結果】アンケート調査を集計した結果、回収数79件、回収率が87.8%で、有効回答率は97.5%であった。

実習中に暴力を受けた、また暴力を目撃したについて「有り」が2人（2.6%）、「無し」が75人（97.4%）であった。受けた暴力については、「身体的暴力」が1人（1.3%）、「言語的暴力」が1人（1.3%）で、「性的暴力」はなかった。暴力を受けたもしくは目撃した実習領域は、「高齢者看護学」が1人（1.3%）、「在宅看護学」が1人（1.3%）

であった。実習中に暴力を受けた、または目撃した時にどのようなことを感じ、実際にどのようにしたのかについて分析した結果、「痛いけど、実習させてもらっているから仕方ない。」「何もしなかった。」「悲しく、悔しい気持ちになった。」「患者へ話しかける頻度を患者に合わせたものにしていった。」「援助内容を分かりやすく説明した。」が抽出された。

【考察】調査対象のうち2.6%が暴言暴力を受けていたが、病院職員の75.3%が暴力を受けていることと比較すると少ない。これは、学生の場合、受け持ち患者が一人であり、受け持ち患者には人間関係を構築しやすい対象が選定されていることに起因していると推察する。アンケート調査から身体的暴力を受けた際の対応としては、どのように対応すれば良いのか分からなく、実習だから仕方ないと自分を言い聞かせ、いわば「我慢」をするという対応方法であった。暴力を受けた際の心理的ダメージは虐待につながりやすい。しかし学生はストレスコーピングをせず、患者への対応を変化させていた。それは、援助内容を分かりやすく説明する、患者へ話しかける頻度を患者に合わせたものにするであった。認知症高齢者はその症状により様々な事を理解できず、分からないことだらけの中で不安や苛立ちが大きくなっている。そのため自尊心を傷つけないような関わりをしつつストレスにならない環境内の刺激の質と調整をする必要がある。このことを踏まえ学生のとった対応をみると患者の理解力に合わせて理解できるように援助内容を分かりやすく説明したことは、患者の不安の軽減につながり、認知症高齢者に対し効果的な関わり方が出来ていたと考える。また患者へ話しかける頻度を患者に合わせたものにしたという対応は、環境からストレスを感じやすい認知症高齢者のストレスを最小限に抑え、情報収集を出来ていたと考える。興奮状態にいる時に話しかけたとしても、コミュニケーションをとることは難しく、さらに興奮させてしまう可能性もあるため、患者に合わせてコミュニケーションを図るといった対応の仕方は効果的であったと考える。

【結論】領域別看護学実習を履修した大学4年生の2.6%が高齢者から暴力を受けていた。認知症高齢者からの暴言暴力への具体的な対応としては、「患者の理解力に合わせて援助内容を分かりやすく説明する」、「患者へ話しかける頻度を患者へ合わせたものにしていった」であった。